



Title	野球ファンの内集団協力を集団間地位が及ぼす影響
Author(s)	中川, 裕美
Citation	対人社会心理学研究. 2018, 18, p. 61-69
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70542
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

野球ファンの内集団協力を内集団地位が及ぼす影響¹⁾

中川 裕美(広島修道大学大学院人文科学研究科)

社会心理学の分野において、内集団協力を説明する代表的な理論には社会的アイデンティティ理論(SIT)と閉ざされた一般互酬仮説(BGR)がある。SIT は自己と集団の同一化から、BGR は互惠性の期待から内集団協力が生じるという。中川・横田・中西(2015)により野球ファンにおける内集団協力には、二つの理論が記述する心理過程が同時に働くことが示された。さらに、中川・横田・中西(投稿中)で協力行動にかかるコストを明示すると、SIT よりも BGR の心理過程が強く働き内集団協力が生じた。このことから、SIT と BGR の心理過程の働きを規定する状況要因の一つは、協力行動のコストであることが示唆された。しかし、中川他の実験では集団間の関係性が曖昧であり、他集団の比較を前提とする SIT の心理過程を引き出すには不利な状況だったと考えられる。そこで、本研究ではコストは明示したままで集団間の関係性を明確にするため、集団間の地位を提示した。地位を提示した状況では、SIT が支持されるか否かを検討を行った。実験では、カープファン 81 名(男性 47 名、女性 33 名、不明 1 名)に地位の刺激(高地位/低地位/統制)をブラインディングした後、内集団協力を測定した。その結果、地位の効果が現れず、地位の効果を除いた内集団協力では SIT と BGR ともに支持されなかった。

キーワード: 内集団協力、社会的アイデンティティ理論、閉ざされた一般互酬仮説、実在集団

問題

人は自分の所属する集団(内集団)に対して協力的に振る舞う傾向がある。例えば、野球ファンなら同じチームを応援するファンに好意を抱き、災害時には多額の寄付が集まる。このように内集団に対して、好意的・協力的な評価や行動をする現象を内集団協力という(Tajfel & Turner, 1979)。

内集団協力を説明する主流な理論として、社会的アイデンティティ理論(Social Identity Theory; 以下, SIT; Tajfel & Turner, 1979)と閉ざされた一般互酬仮説(Bounded Generalized Reciprocity Hypothesis; 以下, BGR; Yamagishi & Kiyonari, 2000)がある。これらの理論は、それぞれ異なる視点から内集団協力を説明している。SIT によると集団に同一化した自己が他の集団との比較を通じて肯定的な自己観を獲得しようとするため協力的になる。一方、BGR によると自身が協力すれば他の内集団成員から将来的に協力が返報されるとの互惠性の期待を抱き協力的になる。すなわち、SIT では個人の基本的欲求から、BGR では集団内で利益を享受し続けようとする適応的な行動から協力行動が生じると主張された。

本研究では、野球チームの一つである広島東洋カープ(以下、カープ)のファンを対象に SIT と BGR の妥当性および状況要因を検討する。先行研究である中川・横田・中西(2015, 投稿中)により両理論の妥当性が示され、さらに両理論の心理過程の働きを規定する状況要因の一つが、協力行動のコストであることが示唆された。この知見を踏まえ、コスト以外にも集団間の地位が状況要因になり得ると予測し、両理論で説明される内集団協力が及ぼす影響について検討を行う。

従来多くの研究では最小条件集団を用いて両理論の妥当性が議論されてきた(e.g., Tajfel & Turner, 1986; Yamagishi & Kiyonari, 2000)。最小条件集団を対象とした研究では BGR のみが支持され SIT は支持されない傾向にあることが分かっている(神・山岸, 1997; 清成, 2002; Yamagishi & Kiyonari, 2000; Yamagishi & Mifune, 2008)。反対に、現実場面に存在する集団(以下、実在集団)を対象とした研究では SIT のみが支持され(Liebkind, Henning-Lindblom, & Solheim, 2006; Mummendey, Klink, & Brown, 2001)、BGR が支持された研究はほとんど存在しない(牧村・山岸, 2003a, 2003b; 三船・牧村・山岸, 2007; Yamagishi, Makimura, Foody, Matsuda, Kiyonari, & Platow, 2005)。このように集団の性質の違いによって支持される理論が異なることが明らかにされている。しかし、要因統制の難しい実在集団を対象とした研究では、SIT の妥当性しか検討されていない点や外集団へのステレオタイプといった混交要因の存在など解決すべき課題も残されている。

また、両理論は相互背反ではなく、それぞれが独立に内集団協力を説明するとの主張もある(Stroebe, Lodewijkx, & Spears, 2005; 横田・結城, 2009)。そこで、中川他(2015, 投稿中)は野球ファンを対象に SIT と BGR それぞれが独立に働く仮定し両理論の妥当性を検証する実験デザインを構築した。さらに、特定の外集団を設定しないことで実在集団に混交する要因を統制した。以下に中川他(2015, 投稿中)の概要を記す。

野球ファンの内集団協力

中川他(2015)はカープファンを対象に、シナリオによる場面想定法実験を行った。実験では日常場面で困って

いる相手(第三者)を設定し参加者と相手の集団所属性の知識操作²⁾を行った上で、相手を助けると思う程度を内集団協力の指標とした。相互に相手の情報が分からない相互不明(統制)条件と比較して、参加者と相手の所属性がお互いに分かる条件(内集団相互条件)で協力的であればBGRが支持され、参加者だけが一方的に相手の所属性が分かる条件(内集団一方条件)で協力的であればSITが支持されたとと言える。実験の結果、お互いにカープファンであると分かる内集団相互条件で最も協力的になった(BGR 支持)だけではなく、相手がカープファンと分かるだけの内集団一方条件で相互不明条件よりも協力的になった(SIT 支持)。すなわち、両理論の妥当性が示された。

続く中川他(投稿中)はWeb調査により、参加者の対象を一般の野球ファンに拡大し、中川他(2015)を踏襲したシナリオに協力行動のコストを明示して内集団協力を測定した。その結果、お互いに野球ファンであると分かる内集団相互条件のみで他条件よりも協力的になり、SITよりもBGRの心理過程が強く働いていた³⁾。

これらの結果から、協力にかかるコストによって現実的な社会的交換場面であるとの感覚のリアリティ(Kiyonari, Tanida, & Yamagishi, 2000)が高まりBGRの心理過程が強く働いたことが考えられる。また、協力行動にコストがかかる場合には、そのコストに対して他の内集団成員から得られる返報が見合うか否かが重要になるという事実も互惠性の期待の効果を引き上げたと考えられる。すなわち、中川他(2015, 投稿中)から両理論の心理過程を規定する状況要因の一つは、協力行動のコストであることが示唆された。

ただし、中川他(2015, 投稿中)の結果から、協力行動に伴うコストが両理論の状況要因であるとはまだ断定できない。なぜなら、中川他で想定させた場面は、特定の外集団を設定しないという実験デザイン上、集団間の関係性が曖昧でSITの心理過程が十分に顕現化される状況ではなかったからである。中川他における特定の外集団とは、自分の応援するチーム以外の野球ファンのことを指す。例えば、参加者がカープファンの場合、阪神ファンなどの具体的な外集団を設定すると外集団へのステレオタイプが協力行動へ影響してしまう。そのため、中川他の実験デザインでは、単にお互いが内集団成員同士であると分かる、あるいは不明であるかが操作された。以上を踏まえて、本研究では集団間の地位を提示しSITの心理過程が引き出されやすい状況を設定した場合、SITが支持されるかを検討することを目的とした。

集団間地位

中川他の実験デザインにより、実在集団における両理論の妥当性を検討することが可能になった。しかし、実在

集団には最小条件集団では見られない集団間の地位や勢力が存在することが多い。そのため、実在集団を対象にする場合、混交要因以外にも地位や勢力との関係性を考慮しなければならない。地位と勢力はともに集団間の関係性を明瞭にする働きを持つ。ただし、地位は全面的に他者からの評価によって決定されるのに対し、勢力は他者からの評価の影響を受けない(坂田・三沢, 2016)。

本研究で対象とした野球ファンには、チーム間の順位による地位が存在する。そして、野球ファンはチーム間の順位による地位を参照して各ファン集団の地位を決定すると仮定し検討を行っていく⁴⁾。なぜなら、野球ファンは自分の応援するチームとの同一化が高く、チーム間の勝敗によって各ファン集団の優越性が示唆されやすいからである。チーム間の勝敗は、他の球団を応援するファンからの明確な相対評価にもつながる。そのため、チーム間の順位が、ファン集団の地位として機能する可能性は十分にあると言える。また、野球ファンには栄光浴(Basking in reflected glory; Cialdini, Borden, Thorne, Walker, Freeman, & Sloan, 1976)を得たいという動機づけが備わっており、応援するチームの勝敗を意識しやすい(Billings, Devlin, & Brown, 2016; Wann & Branscombe, 1990)。栄光浴とは、同一化した集団が良いパフォーマンスをすれば自分が優れた栄光を得たように感じる現象のことを指す。つまり、チームが勝てるかもしれない状況では、個人が集団に同一化して栄光浴を得たいとの動機づけが高まる。したがって、チーム間の順位による地位は勝敗を意識させ、栄光浴の観点からもSITの心理過程が引き出される状況要因として有効であると考えられる。

SITによると内集団協力は自己と同一化した集団と他集団を比較し、優越させるために生じる。地位によって集団間の差異が明確になれば、同一化が起こりやすくなりSITに基づく内集団協力が生じやすいと予測される。さらに、SITは地位格差のある集団間行動も予測する。地位が顕現化すると同一化が促されるが、低地位集団の場合、現在の地位が変動的であるという条件が必要となる。相対的に資源量の多い高地位集団は、低地位集団よりも同一化、内集団協力傾向が高い(Doosje, Spears, & Ellemers, 2002)。一方、低地位集団は資源量に限りがあるため、行動に受ける制約は相対的に多い。そのため、同一化が起こりにくい。しかし、集団の地位が変動的であれば内・外集団の類似性が高まり、高地位集団の成員は地位によって安定した同一化が脅威にさらされ、低地位集団の成員は同一化が強まるきっかけとなる。そのため、低地位集団の成員は現在の地位に変動性がある場合のみ、勝利に向け内集団協力を行う(Liebe & Tutic, 2010; Scheepers, Spears, Doosje, & Manstead, 2006; Vez-

zali, Andrighetto, Trifiletti, & Visintin, 2012)。以上より、地位格差を顕現化させることで SIT が予測する心理過程が強く働く可能性がある。

野球ファンの地位

実在集団における安定した地位は勢力の概念と近く、例えば職場での公的な関係性、国同士の経済的な豊かさの違いなど多くは潜在的に決定されている。一方、本研究で対象とした野球ファンの地位は、上記の安定した地位とは異なり変動的で、毎年チームの勝敗によって決まる。これまでの戦績の推移から、平均的に勝率が高いチーム(高地位)、低いチーム(低地位)のファンがすでに現在の地位を推測している可能性もある。しかしながら、本実験が行われた時期はペナントレースの序盤であり、参加者が応援するチームの勝敗を予測できる段階ではなかった。さらに、本研究で対象としたカープの 2000 年から 2015 年の戦績を見ると、前年度と比較して順位に変動があった確率は 53%と非常に高い(日本野球機構, 2016)。したがって、本研究では野球ファンの地位は変動的であると考え、低地位/高地位集団ともに内集団協力が生じると予測した。

社会支配志向性 本研究では野球ファンの地位が変動的であると仮定したが、その階層関係を容認する程度には個人差があると考えられる。また、地位(高地位/低地位/統制)の刺激は参加者ごとにプライミングするため、そうした個人差がプライミングに与える影響を検討する必要がある。そのため、社会支配志向性尺度(Social Dominance Orientation; 以下, SDO; Sidanius & Pratto, 1999; 日本語版: 黒石・森口, 2003)を用いて階層関係を容認する程度を測定する。SDO とは、集団間の平等または階層的な関係性についての個人の志向性を指す(杉浦・坂田・清水, 2014)。SDO によると、個人は二つのイデオロギー—いずれかに関連して行動を決断するという。SDO が高いと、集団間の階層関係は正当なものであるというイデオロギーに従って差別的な行動(内集団協力)をする。SDO が低いと、集団間の不平等さを改善しようとするイデオロギーに従って平等主義的な行動をする。

SDO を測定することによって、地位の条件間で SDO が過度に高いまたは低い参加者を確認するとともに、高地位/低地位条件の参加者がともに内集団協力をする動機につながる SDO 得点が高いかを検討する。

予測

地位が変動的な場合、高地位/低地位集団の成員はそれぞれ、自集団を他集団から分離しようとする。そのため、地位を顕現化すると SIT の心理過程が強く働き、自分が相手を内集団成員と認知するだけで協力的になるだろう。一方、地位をプライミングしていない統制条件では中川他

(投稿中)の結果が再現され、互惠性の期待から相互に内集団成員と分かる状況でのみ協力的になるだろう。

仮説

地位(高地位/低地位)を提示すると、自分が相手を内集団成員と分かる内集団相互・一方条件で協力的になる(仮説 1; SIT 支持)。地位を提示しない統制条件では、協力行動のコストの効果からお互いに内集団成員であると分かる内集団相互条件のみで協力的になる(仮説 2; BGR 支持)。

方法

実験参加者および実験日時

本実験は 2016 年の 4 月から 6 月にかけて行い、広島県内の大学生 292 名(男性 145 名, 女性 140 名, 不明 7 名)が参加した。未回答が多かった 1 名を削除した 291 名のうち、カープを応援するファンは 81 名(男性 47 名, 女性 33 名, 不明 1 名)、応援はしていないが比較的カープが好きなのは 126 名(男性 42 名, 女性 84 名)、その他の球団を応援する/比較的好きな人は 84 名(男性 56 名, 女性 23 名, 不明 5 名)であった。

分析にはカープファンを用い、高地位条件に 33 名(男性 22 名, 女性 10 名, 不明 1 名)、低地位条件に 22 名(男性 12 名, 女性 10 名)、統制条件に 26 名(男性 13 名, 女性 13 名)が回答した(参加者間配置)。平均年齢は 19.18 歳($SD = 1.10$)であった。

実験デザイン

互惠性の期待の有無(清成, 2002)を操作するため、シナリオに登場するあなた(参加者)と第三者の B さん(相手)が、参加者の応援する野球チームのロゴマークが入った T シャツを着ているか否かで集団所属性を示した(中川他, 2015)。互いに相手が同じ野球チームのファンだと分かる内集団相互条件、参加者のみ相手が同じチームのファンだと分かる内集団一方条件、互いに集団所属性が分からない相互不明条件の 3 条件を設定した(参加者内配置)。

集団所属性の知識の操作

参加者と面識の無い第三者である B さんがシナリオに登場する相手であり、各条件に共通して互いに相手の所属性について推測している図とともに「各シナリオではあなたも、シナリオに登場する B さんも〇〇チーム(参加者の応援する/比較的好きなチーム名を〇〇に当てはめる)のファンです」と教示された。その後、内集団相互条件では「あなたも、B さんも、お互いに〇〇チームのファンであると分かります」、内集団一方条件では「あなたは B さんが〇〇チームのファンであると分かりますが、B さんからはあなたがどこのファンであるかは分かりません」、相互不明条件では「あなたも、B さんも、お互いに相手がどこ

のチームのファンであるかは分かりません」とそれぞれ教示された。

後述するシナリオの内容は、各条件とも同一であった。初めに相互不明条件(デフォルトの協力行動)への回答を求め、その後、内集団相互・一方条件の回答順序はカウンターバランスがとられた。援助行動と援助期待のシナリオへの回答順序もランダムに設定された。

集団間地位の刺激

高地位条件では、参加者に「カープの成績の上昇による高地位の獲得」に関連した見出し、選手の写真(スポーツニッポン, 2016)や2000年から2015年度の中で順位が上昇した年を強調したグラフ(日本野球機構, 2016)を一読するよう求めた。その後、成績が上昇した原因をいくつか載せてある350字程度の記事⁹を読ませ「この記事の中から、成績が上昇した原因としてあなたが最も重要だと思う部分に下線を引いてください(複数可)」と「あなた自身はカープの成績が上昇した原因はどこにあると思いますか? あなたの意見を簡潔に述べてください(自由記述)」と尋ねた。

低地位条件では、高地位条件と同じ写真、グラフを用い、強調する文を一部変更した。低地位条件では、「カープの成績の低迷による低地位の獲得」に関連した見出し、順位が下降した年を強調したグラフを使用し、同じく成績が低迷した原因を記載した記事を読ませた。質問項目は「成績が上昇した」の部分を「成績が低迷した」に変更して尋ねた。

統制条件では、カープの地位に関係ない毎年開催される広島のお祭り(とうかさん)に関連した見出し、写真、記事¹⁰を用いた。見出しと写真を一読した後、「この記事の中から、とうかさんの起源のうち、あなたが最も重要だと思う部分に下線を引いてください(複数可)」と「あなた自身はどうかさんが400年近く続いている理由はどこにあると思いますか? あなたの意見を簡潔に述べてください(自由記述)」と尋ねた。これらの課題は記事を念入りに読ませるために設けられた。各条件における記事の全文をAppendix 1に示す。

測定項目

参加者の応援する/比較的好きな野球チームの選択、同一化(Hogg, Fielding, Johnson, Masser, Russell, & Svensson, 2006; Kaiser & Pratt-Hyatt, 2009)、シナリオによる援助行動・援助期待(各条件)、現在のカープの強さをどう思うか(統制はとうかさんの魅力をどう感じますか)、SDO(黒石・森口, 2003)を測定した。

手続き

応援する野球チームがある参加者は、日本プロ野球機構が定める全12球団の中からチームを選択し、二重丸をつけるよう求めた。一方、応援する野球チームがない

参加者には、比較的好きなチームを選択し、一重丸をつけるよう求めた。その後の質問項目とシナリオ内にある「〇〇ファン」の「〇〇」には参加者が選択した野球チーム名を当てはめて回答するように教示された。

応援する/比較的好きな野球チームへの同一化(Hogg et al., 2006; Kaiser & Pratt-Hyatt, 2009)は、主語をすべて「〇〇ファン」に変えて作成した尺度により5件法(1: 全くそう思わない~5: 非常にそう思う)で測定した。「自分が典型的な〇〇ファンであるとされたら、気分がいい」、「〇〇が好きだ」など13項目から構成され、数値が高いほど集団に強く同一化していることを示す。

次に、地位のプライミング課題を行った。課題の最後には、「現在(2016年4月)のカープの強さをどう思いますか」と5件法(1: 非常に弱いと思う~5: 非常に強いと思う)で尋ねた。統制条件は、「現在(2016年4月)のとうかさんの魅力をどう思いますか」と5件法(1: 全く魅力がない~5: 非常に魅力がある)で尋ねた。

プライミング課題の後、援助行動・援助期待のシナリオ(中川他, 投稿中)を提示した。シナリオは条件を通して同一であり、日常生活で起こる困難な場面に直面した時、あなたがBさんを助けると思う程度(援助行動)、Bさんがあなたを助けてくれると思う程度(援助期待)を測定した(5件法: 1. 全くそう思わない~5. 非常にそう思う)。例えば、「Bさんは電車の乗り継ぎの仕方が分からず困っています。もし、道を教えるとあなたは乗車するはずのバスに乗ることができず、大事な仕事に遅れるかもしれません。あなたはBさんを助けてあげると思いますか?」などの4つのシナリオを設けた。

最後に、SDO(黒石・森口, 2003)で集団間の平等または階層的な関係性についての個人の志向性を測定した。「ある種の人たちは他の集団の人たちよりも良い扱いを受けるに値する」、「私たちは社会的平等を目指すべきである(逆転項目)」などの16項目(7件法: 1. 全く同意しない/反対する~7. 完全に同意する/賛成する)で構成され、数値が高いほど個人の志向性として階層的な社会構造を強く望むことを示す。

結果¹¹

援助行動のシナリオ4項目について、信頼性係数(クロンバックの α 係数)を求めたところ、内集団相互条件($\alpha = .68$)、内集団一方条件($\alpha = .67$)、相互不明条件($\alpha = .54$)であった。相互不明条件の α 係数が比較的低いことから、シナリオ間の相関分析を行った。その結果、労力がコストであるシナリオは他の項目との相関が見られなかった($r = -.01, p = .93$)。しかし、条件間のパターンは、労力のシナリオを除いても($\alpha = .56$)、全項目を合算しても大きく違いはなかった。 α 係数は比較的低い値であるが、中

川他(投稿中)との整合性を考慮し全項目を合算して援助行動得点とした。同じく援助期待のシナリオ4項目についても、信頼性係数を求めたところ、内集団相互条件($\alpha = .76$)、内集団一方条件($\alpha = .81$)、相互不明条件($\alpha = .72$)で十分な内的整合性が見られたため、全項目を合算して援助期待得点とした。同一化尺度($\alpha = .95$)とSDO($\alpha = .79$)についてもそれぞれ、高い内的整合性が見られた。カープファンの同一化項目の合計平均($M = 41.99$, $SD = 10.23$)は、比較的カープが好きな人($M = 28.22$, $SD = 9.41$)より同一化の程度が高かった($t(204) = 9.89$, $p < .01$, $d = 1.41$)。したがって、カープファンは単にカープが好きな人よりも内集団に強く同一化していることが確認された⁸⁾。

集団間地位

操作チェック はじめに、「実際のカープの強さ(自己評価)」の項目によりプライミングした地位を実際の地位として認識したか操作チェックを行なった。カープファンは高地位条件($M = 3.81$, $SD = 0.79$)で低地位条件($M = 3.23$, $SD = 0.75$)よりもカープを強いと評価⁹⁾した($t(51) = 2.68$, $p < .01$, $d = 0.74$)。しかし、高地位条件($M = 62.48$, $SD = 12.15$)、低地位条件($M = 58.09$, $SD = 12.43$)、統制条件($M = 58.73$, $SD = 10.72$)のいずれもSDOの程度に有意な差は得られなかった($F(2, 78) = 1.17$, $p = .32$, $\eta^2 = .00$)。

援助期待 Figure 1 にカープファンの地位の刺激別に各条件の援助期待の合計得点を示す。それぞれの地位条件で、互惠性の期待の操作が成功したかを確認するため、援助期待を従属変数、集団所属性の知識と地位を独立変数とした分散分析を行なった。その結果、集団所属性の知識の主効果は得られた($F(2, 152) = 14.10$, $p < .01$, $\eta^2 = .04$)が、地位の主効果($F(2, 76) = 0.54$, $p = .59$, $\eta^2 = .00$)と交互作用効果($F(4, 152) = 0.44$, $p = .70$, $\eta^2 = .00$)はいずれも得られなかった。地位の効果が得られなかったことから、地位を無視し中川他(投稿中)の分析方法と同じく参加者を合算して分析を行なった。同様に集団所属性の主効果が見られた($F(2, 156) = 14.51$, $p < .01$, $\eta^2 = .04$)。Holm法の多重比較を行なったところ内集団相互条件($M = 12.71$, $SD = 3.09$)で最も援助期待が高く($p < .01$)、続いて内集団一方条件($M = 11.41$, $SD = 3.20$)と相互不明条件($M = 11.30$, $SD = 3.10$)が同程度に高かった($p < .01$)。したがって、地位をプールしたカープファンの分析では互惠性の期待の操作は成功したと言える(清成, 2002)。

援助行動 Figure 2 にカープファンの地位の刺激別に各条件の援助行動の合計得点を示す。各地位で、援助行動に差があるか否かを検討するため、援助行動を従属変数、集団所属性の知識と地位を独立変数とした分散

分析を行なった。その結果、集団所属性の知識の主効果は得られた($F(2, 152) = 6.80$, $p < .01$, $\eta^2 = .01$)が、地位の主効果($F(2, 76) = 0.88$, $p = .42$, $\eta^2 = .00$)と交互作用効果($F(4, 152) = 1.17$, $p = .33$, $\eta^2 = .00$)はいずれも得られなかった。地位の効果が得られなかったことから、地位条件をつぶした分析を行なった。援助期待と同様に集団所属性の主効果が得られた($F(2, 156) = 7.56$, $p < .01$, $\eta^2 = .01$)。Holm法の多重比較を行なったところ、内集団相互条件($M = 14.05$, $SD = 2.82$)と一方条件($M = 13.89$, $SD = 2.71$)における援助行動は同程度で、両条件ともに相互不明条件($M = 13.38$, $SD = 2.64$)より高かった(内集団相互・一方条件間: $p < .01$, 内集団一方・相互不明条件間: $p < .05$)。以上の分析より、地位の効果が得られなかったため全ての仮説が支持されなかった。さらに、地位の効果を除いた平均値のパターンではSITを支持する傾向であった。

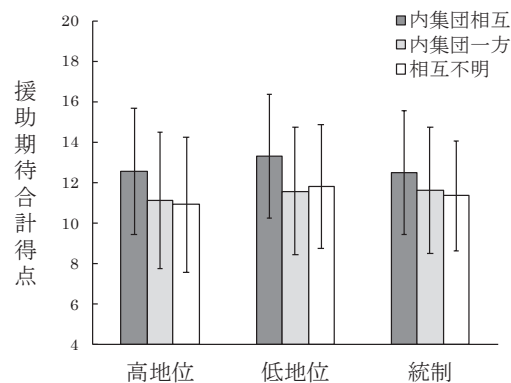


Figure 1 援助期待の平均値(エラーバーは標準偏差)

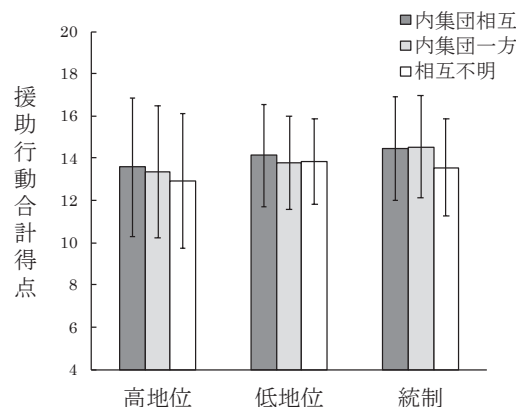


Figure 2 援助行動の平均値(エラーバーは標準偏差)

同一化と援助行動 / SDO との関連

SIT が支持される傾向であったことから、同一化と援助行動との相関分析を行った。また、SDOが高いほどSITの心理過程が強く働き、内集団相互・一方条件で協力的になるか否かを検討した(Table 1)。地位条件全てのカープファンを対象に相関分析を行った結果、同一化と内集

団相互・一方条件の援助行動、同一化と SDO に関連はなく、SIT は支持されなかった。

地位別に見ると、高地位条件では同一化、SDO とともに各条件の援助行動に影響しなかった。低地位条件では SDO が高いほど全条件で協力の程度が低くなった($p < .01$)。統制条件では SDO が高いほど相互不明条件($p < .05$)で協力の程度が高くなった。また、分布を確認したところ、どの条件でも過度に SDO の高いまたは低い参加者はいなかった。

さらに、内集団一方条件でデフォルトの互惠性の期待を抱いたことで援助行動に影響が及ぼされた可能性を考慮して、互惠性の期待を統制した偏相関分析を行った。その結果、互惠性の期待を統制しても、同一化と援助行動に有意な相関関係はなかった。

Table 1 測定項目の相関係数(n)

		高地位	低地位	統制	全員
同一化と 援助行動	相互	.15	.34	.04	.13
	一方	.18	.37	.21	.20
	不明	.21	.12	.07	.12
SDO と 援助行動	相互	-.26	-.51**	.24	-.21
	一方	-.23	-.55**	.36	-.17
	不明	-.22	-.63**	.43*	-.16
同一化と SDO		-.10	-.40	-.03	-.14

* $p < .05$, ** $p < .01$ (全員は地位条件全てのカープファン)

考察

本研究の目的は、協力行動にコストがかかる状況で地位を提示した場合、SIT が支持されるか否かを検討することであった。しかし、地位プライミングの効果が見られず、高地位、低地位、統制条件それぞれの条件間で、援助行動・援助期待の差はなかった。

そのため、地位条件を無視し、中川他(投稿中)の分析方法と同じく、集団所属性の知識条件ごとの援助行動と援助期待を検討した。その結果、援助期待では BGR が支持された。援助行動では知識条件間で SIT を支持するような平均値のパターンが示されたが、同一化と援助行動には関連が見られず SIT は支持されなかった。すなわち、地位の高低に関係なく内集団成員からの互惠性を期待しながら、自身は SIT でも BGR でも説明できない内集団協力を行っていた。上記の結果から、相手への期待と自身の行動は一貫せず、援助行動には両理論で説明できない要因が影響することが明らかとなった。したがって、実在集団における内集団協力には、SIT および BGR の効果が限定的である可能性がある。

この結果は相関分析からも明らかで、カープファンの同一化と援助行動には関連がなく、剰余変数になり得る

互惠性の期待を統制しても関連は見られなかった。

また、SDO との関連については、同じく地位の効果が見られなかったことから、本研究の知見のみで積極的な解釈を行うことは難しいと考えられる。低地位条件では SDO が高いほど、全条件で協力せず同一化が弱まったが、地位の操作と関係ない単なる個人差とも考えられる。統制条件では SDO が高いほど不明条件で協力的になった。Liebe & Tutic(2010)では、SDO が高いと考えられる高地位集団の成員は集団レベルでは内集団協力を示したが、個人レベルでの分析では、外集団協力を示した参加者の割合も多いことが明らかになった。つまり、統制条件の結果は SDO の高い個人が単に利他的な行動を示しただけという可能性がある。

今後の課題

本研究では、地位の手がかりを操作したが、その効果は見られなかった。本研究の結果から、有意ではないものの統制条件で内集団一方条件における協力傾向が高かった。統制条件では地位に関係ない広島のお祭りをプライムしたため、野球ファンではなく広島県民としての同一化が強まった可能性がある。すなわち、内集団のカテゴリーが野球ファンから広島県民に移行して同一化が強まったことにより、他の広島県民に協力的になったと考えられる。だが、プライミングが地位を明確に認識させる手法として適切ではなかったとも考えられる。近年では、プライミング操作により得られた結果の再現性は低いとの主張も存在する(藤島・樋口, 2016)。

さらに、低地位集団の成員には内集団協力をして地位を逆転させる以外に、集団状況が変わりそうにしなければ集団を離脱し他の集団に所属するという選択肢もある(Ellemers, 1993)。本研究では低地位集団の野球ファンがどの程度、自身の協力によって集団状況を変えることができるか、内集団から離脱(ファンを辞めること)できると思う程度について測定していなかった。そのため、今後の研究で野球ファンは応援するチームを変えることができると思う程度を測定し、低地位集団の成員の流動性を考慮した分析を行う必要がある。

今後の研究では、まず地位の刺激を提示する手法を変更し、野球ファンにとってチーム間の順位が地位として機能し得るのか検討しなければならないだろう。また、本研究では現在のチームの順位を考慮しておらず、プライミングによって栄光浴を感じる程度も測定していなかった。そこで、チームが勝利した(栄光浴が高まる)時や敗北した時のファン行動を比較する縦断的なフィールドワークを行っていく必要がある。それと同時に直観的に地位を認識できる実験室実験など(e.g., 映像、集団討論)を行い、現実場面と実験室場面における整合性を比較しなければならないだろう。

引用文献

- Billings, A. C., Devlin, M. B., & Brown, K. A. (2016). BIRGing with the best: CORFing for the country: Fan identification and nationalism during the 2014 FIFA World Cup. *Journal of Global Sport Management*, 1, 49-65. doi: 10.1080/24704067.2016.1177353.
- Cialdini, R. B., Borden, R. J., Thorne, A., Walker, M. R., Freeman, S., & Sloan, L. R. (1976). Basking in reflected glory: Three (football) field studies. *Journal of Personality and Social Psychology*, 34, 366-375.
- Doosje, B., Spears, R., & Ellemers, N. (2002). Social identity as both cause and effect: The development of group identification in response to anticipated and actual changes in the intergroup status hierarchy. *British Journal of Social Psychology*, 41, 57-76.
- Ellemers, N. (1993). The influence of socio-structural variables on identity management strategies. *European Review of Social Psychology*, 4, 27-57. doi: 10.1080/14792779343000013.
- 藤島 喜嗣・樋口 匡貴 (2016). 社会心理学における“phacking”の実践例 心理学評論, 59, 84-97.
- Hogg, M. A., Fielding, K. S., Johnson, D., Masser, B., Russell, E., & Svensson, A. (2006). Demographic category membership and leadership in small groups: A social identity analysis. *The Leadership Quarterly*, 17, 335-350.
- Ihaka, R., & Gentleman, R. (1996). R: A language for data analysis and graphics. *Journal of Computational and Graphical Statistics*, 5, 299-314.
- 神 信人・山岸 俊男 (1997). 社会的ジレンマにおける集団協力ヒューリスティクスの効果 社会心理学研究, 12, 190-198.
- Jennifer, M (2012). Sports fans, athletes, and communication: Applying theory to understanding if fans impact athletes' cognitive and physical performance. In Earnheardt, Haridakis, & Hungenberg (Ed.), *Sports Fans, Identity, and Socialization: Exploring the Fandemonium* (pp. 106-111). Plymouth, UK: Lexington Books.
- Kaiser, C. R., & Pratt-Hyatt, J. S. (2009). Distributing prejudice unequally: Do whites direct their prejudice toward strongly identified minorities? *Journal of Personality and Social Psychology*, 96, 432-445.
- 清成 透子 (2002). 一般交換システムに対する期待と内集団ひいき——閉ざされた互酬性の期待に関する実験研究—— 心理学研究, 73, 1-9.
- Kiyonari, T., Tanida, S., & Yamagishi, T. (2000). Social exchange and reciprocity: confusion or a heuristic? *Evolution and Human Behavior*, 21, 411-427.
- クリシェ株式会社 (2014). とうかさん 広島 の 歴史 <http://hiroshima-mall.com/fes/toukasan.html> (2014年11月24日掲載)
- 黒石 憲洋・森口 和 (2003). 社会的支配志向 (SDO) 尺度 日本語版作成の試み (1) 日本心理学会第 67 回大会論文集, 97.
- Liebe, U., & Tutić, A. (2010). Status groups and altruistic behaviour in dictator games. *Rationality and Society*, 22, 353-380. doi: 10.1177/1043463110366232.
- Liebkind, K., Henning-Lindblom, A., & Solheim, E. (2006). Ingroup favouritism and outgroup derogation among Swedish-speaking Finns. *Nordic Psychology*, 58, 262-278. doi: 10.1027/1901-2276.58.3.262
- 牧村 洋介・山岸 俊男 (2003a). 成員間に相互作用がある集団における集団間報酬分配に関する実験研究 心理学研究, 73, 488-493.
- 牧村 洋介・山岸 俊男 (2003b). 集団カテゴリーと集団間行動——国籍カテゴリーを用いた実験研究—— 21 世紀 COE 「心の文化・生態学的基盤」ワーキングペーパーシリーズ, No.19, 1-18.
- 三船 恒裕・牧村 洋介・山岸 俊男 (2007). 国籍カテゴリーを用いた「閉ざされた一般的互酬性仮説」の検証 21 世紀 COE 「心の文化・生態学的基盤」ワーキングペーパーシリーズ, No.68, 1-10.
- Mummendey, A., Klink, A., & Brown, R. (2001). Nationalism and patriotism: National identification and out-group rejection. *British Journal of Social Psychology*, 40, 159-172.
- 中川 裕美・横田 晋大・中西 大輔 (2015). 実在集団を用いた社会的アイデンティティ理論および閉ざされた一般互酬仮説の妥当性の検討——広島東洋カープファンを対象とした場面想定法実験—— 社会心理学研究, 30, 153-163.
- 中川 裕美・横田 晋大・中西 大輔 (投稿中). 野球ファンの内集団協力に関する場面想定法実験 心理学研究
- 成澤 浩一・持木 秀仁 (編) (2014). 野球次郎 VOL.1 広島東洋カープ大事典～「野球太郎」特別編集 (廣済堂ベストムック 272 号), イマジニア株式会社
- 日本野球機構 (2016). 広島東洋カープ年度別成績 (1957-2015) http://npb.jp/bis/teams/yearly_c.html (2016年4月5日).
- 坂田 桐子・三沢 良 (2016). 組織と集団過程 北村 英哉・内田 由紀子 (編) 社会心理学概論 (pp.189-192) ナカニシヤ出版
- Scheepers, D., Spears, R., Doosje, B., & Manstead, A. S. R. (2006). Diversity in in-group bias: Structural factors, situational features, and social functions. *Journal of Personality and Social Psychology*, 90, 944-960. doi: 10.1037/0022-3514.90.6.944.
- Sidanius, J. & Pratto, F. (1999). *Social dominance: An intergroup theory of social hierarchy and oppression*. New York: Cambridge University Press.
- 清水 裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD——機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案—— メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.
- Stroebe, K., Lodewijkx, H. F. M., & Spears, R. (2005). Do unto others as they do unto you: Reciprocity and social identification as determinants of in-group favoritism. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 31, 831-845. doi: 10.1177/0146167204271659.
- 杉浦 仁美・坂田 桐子・清水 裕士 (2014). 集団と個人の地位が社会的支配志向性に及ぼす影響 社会心理学研究, 30, 75-85.
- スポーツニッポン (2016). '16 広島カープ開幕特集号, 3月15日, 8-9, 20-21.
- Tajfel, H., & Turner, J. C. (1979). An integrative theory

- of intergroup conflict. In W.G. Austin & S. Worchel (Eds.), *The social psychology of intergroup relations* (pp. 33-47). Monterey, CA: Brooks/Cole.
- Tajfel, H., & Turner, J.C. (1986). The social identity theory of intergroup behavior. In S. Worchel & W.G. Austin (Eds.), *Psychology of intergroup relations*. Chicago: Nelson-Hall. pp.7-24.
- Vezzali, L., Andrighetto, L., Trifiletti, E., & Visintin E. P. (2012). Perceiving status (in)stability in a low-status group: The effects of identification on explicit and implicit intergroup attitudes. *Social Psychology*, 43, 33-40. doi: 10.1027/1864-9335/a000078.
- Wann, D. L., & Branscombe, N. R. (1990). Die-hard and fair-weather fans: Effects of identification on BIRGing and CORFing tendencies. *Journal of Sport & Social Issues*, 14, 103-117.
- Yamagishi, T., & Kiyonari, T., (2000). The group as the container of generalized reciprocity. *Social Psychology Quarterly*, 63, 116-132.
- Yamagishi, T., Makimura, Y., Foddy, M., Matsuda, M., Kiyonari, T., & Platow, M. J. (2005). Comparisons of Australians and Japanese on group-based cooperation. *Asian Journal of Social Psychology*, 8, 173-190.
- Yamagishi, T., & Mifune, N. (2008). Does shared group membership promote altruism?: Fear, greed and reputation. *Rationality and Society*, 20, 5-30. doi: 10.1177/1043463107085442.
- 横田 晋大・結城 雅樹 (2009). 外集団脅威と集団内相互依存性——内集団ひいきの生起過程の多重性—— 心理学研究, 80, 246-251.

註

- 1) 本研究の一部は日本社会心理学会第 57 回大会で発表された。また、データの収集にあたり広島大学の小宮あすか先生にご協力していただきました。この場を借りてお礼申し上げます。
- 2) 中川他(2015)で記載された集団所属性の知識の条件名は、相互(内集団相互)条件、自知(内集団一方)条件、不明

(相互不明)条件である。

3) 全12球団のチーム別に分析を行っても、野球ファン全体の内集団協力とほぼ同じパターンが示された。したがって、中川他(2015)で得られた結果はカープファンに特異的なものではないと言える。また、条件間の協力のパターンはBGRを支持するものであったが、内集団相互条件において同一化と協力行動の正の相関関係(SITの効果が弱く残存した。そのため、相対的にBGRの心理過程が強く引き出されたと言えるが、厳密にBGRのみが支持されたとは言えない。

4) スポーツファンが、応援するチームの順位をファン集団の地位として知覚するか否かは、先行研究が十分でないことから明確な予測は立てられなかった。しかし、様々なジャンルのスポーツファン 64 名を対象にインタビューを行った研究(Jennifer, 2012)では、スポーツファンは応援を内集団の凝集性を高める集合的行動(集団規範)と捉えており、「応援は勝敗を決める選手たちのパフォーマンスを高める」、「選手のアドレナリンを上昇させる」、「応援は試合の雰囲気左右する大きな役割がある」と回答したファンたちも半数ほど存在した。すなわち、野球ファンは応援のような集合的行動・協力関係をとる動機づけの一部として、チームの順位を変動できることを考えた可能性がある。

5) 記事はスポーツニッポン(2016)、成澤・持木(2014)から一部抜粋し再構成して作成した。

6) 記事はクリシェ株式会社(2014)から一部抜粋し再構成して作成した。

7) 分析には HAD15.0(清水, 2016)とフリー統計ソフト R3.3.3(Ihaka & Gentleman, 1996)を使用した。

8) 同一化は、地位を提示する前に測定しているため、地位の提示が同一化の程度に影響を与えることはなかった。

9) 地位の効果が見られなかったことから、カープを強い / 弱いと思う程度は、個人差であったと考えられる。

高地位条件

2013 年、広島東洋カープは 16 年ぶりにクライマックスシリーズの出場を決めた。球団歴代 5 位の 21 試合連続安打を達成した菊池涼介と、12 試合連続得点を記録した丸佳浩の“キクマルコンビ”の働きは目覚ましくカープはますます強くなってきている。年間最大 37 本塁打を打っているエルドレッドの破壊力はカープを優勝へと近づけていく。また、2012 年には野村祐輔が新人王を獲得し、防御率 1 点台と好成績を残している。広島のプリンスこと堂林翔太も、満塁機会にめっぽう強く満塁機会には打率 5 割という快挙を成し遂げた。カープを古巣として帰ってきた 2000 安打間近の新井貴浩や通算 1000 奪三振を成し遂げた黒田博樹はチームの起爆剤とも言え、さらに強く飛躍していくカープにはかかせない。

低地位条件

1998 年から 15 年間（2012 年まで）、広島東洋カープはクライマックスシリーズに出場できず、万年下位に低迷している。1991 年から 2015 年まで優勝からも遠ざかっている。昨年度は、菊池涼介の両膝のケガと丸佳浩の打率低下により得点源のはずの“キクマルコンビ”の働きも不振に陥り、カープはますます貧打から抜け出せずにいる。同じく頼みのエルドレッドは右膝を故障し、本塁打は過去の 37 本から 19 本にまで半減した。また、2012 年の新人王である野村祐輔も、防御率 1 点台から 4 点台に成績が急降下している。広島のプリンスこと堂林翔太も、2013 年からは成績が急下降し、昨季は 1 軍デビュー以降最少の 33 試合出場にとどまった。カープを古巣として帰ってきた黒田博樹は、年齢とともにケガに泣く場面も多くカープを支える主要選手となれるかが難しいところである。

統制条件

毎年 6 月第 1 週から 3 日間にわたり行われる夏祭り「とうかさん」。とうかさんは広島市中区の三川町円隆寺の境内に祭られている稲荷大明神のことを指している。「とうか」というのは「稲荷」を音読みで読んだことが始まりといわれている。とうかさんの行われる圓陸寺は、1619 年(元和 5 年)に広島藩初代藩主であった浅野長晟が建立した。その建立時以来約 397 年間とうかさんは続いている。開催日時は、1954 年までは旧暦の端午の節句（こどもの日）に行われていたが、新暦では 1 カ月ほどのずれが生じる事があるので、「とうか」を「十日」にかけて、そして 6 月 10 日頃が旧暦の端午の節句の近くになることから 1955 年から旧暦の 6 月 9 日、10 日に行われた。現在の日時になったのは 1998 年からである。

The effect of intergroup status on ingroup cooperation among Japanese baseball fans.

Yumi NAKAGAWA(Graduate School of Faculty of Humanities and Human Sciences, Hiroshima Shudo University)

In this study, we compared the ability of both the Social Identity Theory (SIT) and Bounded Generalized Reciprocity Hypothesis (BGR) to explain ingroup cooperation in real groups. We conducted the vignette experiments that were designed as controlling various confounded factors to possibility influence ingroup cooperation among Japanese baseball fans. In the experiment, we manipulated expectation of reciprocity, which was assumed as a precursor of ingroup cooperation by BGR, by controlling knowledge of group membership. Ingroup cooperation was measured by participants' intent of helping a stranger in four scenarios. According to Nakagawa et al. (2015, submitted), cost of ingroup cooperation can enhanced the psychological process of BGR, while ingroup cooperation without cost proceeds both processes of theories. However, these experiments were unclear intergroup differences and the effect of social identity was weak. Thus, we expressed the stimulus of intergroup status by the perceptual priming to clear intergroup differences. But the result of the experiment was not support the effect of intergroup status. The analysis that the effect of status was removed revealed both theories was not supported.

Keywords: ingroup cooperation, Social Identity Theory, Bounded Generalized Reciprocity Hypothesis, real groups.